

2014年のロッシーニ音楽祭レポート

ペーザロ、ロッシーニ・オペラ・フェスティバル 2014

水谷 彰良

▼2014年8月のロッシーニ・オペラ・フェスティバル▼

今年は8月12日に成田を發ち、その日のうちにペーザロ入りしました。着いたその日は大変暑かったのですが、13日未明の嵐を境に気温が下がり、その後は32度前後で推移して晴天が続きました。

今年のROFは、1月に亡くなった指揮者クラウディオ・アッパードに捧げられることになり(8月4日発表)、開幕前日(9日)の夜9時からポポロ広場にて、アッパード指揮の歴史的な《ランスへの旅》蘇演映像が「1984年の旅(II viaggio 1984)」と題して放映されました(会員Kさんご夫妻は、そこらご覧になったそうです)。

筆者は13日の《ランスへの旅》初日&《アルミーダ》2日目から、21日《小ミサ・ソレムニス [小莊厳ミサ曲]》までの9日間に、《アルミーダ》3回、《セビーリャの理髪師》と《パルミラのアウレリアーノ》各2回、《ランスへの旅》1回、コンサート3種、演奏付き講演会1回と、合計12の催しに列席しました。



◎若者公演《ランスへの旅》(ロッシーニ劇場。8月13日観劇)

最初は若者公演《ランスへの旅》から。アカデミア・ロッシニアーナ(ロッシーニ・アカデミー)約20人の研修生による上演で、演出はいつものエミーリオ・サージですが、今年は8月11日に「小旅行 Viaggetto」と題して6~10歳の子供たちを参加させる《ランスへの旅》の催しと連動し、若者公演でもフィナーレに子供たちが衣装と王冠をつけて手をつないで平土間の通路を歩きました。筆者は13日と16日の両日見るスケジュールでしたが、体調を考えて2回目をパスしました。演奏と配役は次のとおり。

Iván López-Reynoso 指揮 フィラルモニーカ・ジョアキーノ・ロッシーニ (Filarmonica Gioachino Rossini)

コリンナ: Hasmik Torosyan (13日)、Shahar Lavì (16日)

メリベアー侯爵夫人: 脇園彩 [Aya Wakizono]

フォルヴィル伯爵夫人: Isabel Rodríguez García

コルテーゼ夫人: Giulia de Blasis

騎士ベルフィオーレ: Matteo Macchioni (13日)、Nico Darmanin (16日)

リーベンスコフ伯爵: Anton Rositskiy

シドニー卿: Marko Mimica

ドン・プロフオンド: Yunpeng Wang

トロンボノク男爵: Anton Markov

ドン・アルヴァーロ: Iurii Samoilov

ドン・ブルデンツィオ: Claudio Levantino

ドン・ルイジーノ: Christian Collia

デリア: Madison Marie McIntosh

マッダレーナ: Shahar Lavì (13日)、Hasmik Torosyan (16日)

モデスティーナ: 丸尾有香 [Yuka Maruo]

ゼフィリーノ/ジェルソミーノ: Nico Darmanin (13日)、Matteo Macchioni (16日)

アントーニオ: Riccardo Fioratti



指揮者 Iván López-Reynoso はメキシコ人で1990年生まれ。20歳の若さで《フィガロの結婚》を指揮してデビューしたというから驚きです。風貌は映画「スーパーマン」のクリストファー・リーヴがちょっとふくよかになった感じです。これがなかなかいいテンポで音楽を導きました。13日の出演者で良かったのが、コリンナの

Hasmik Torosyan (ソプラノ。アルメニア人)、メリベア侯爵夫人の脇園彩 (メゾソプラノ。日本人)、ドン・プロフォンドの Yunpeng Wang (バリトン。中国人)、シドニー卿の Marko Mimica (バス。クロアチア人) の4人です。例年に比して質が高いのは、250人からオーディションで選ばれたことも大きいのでしょう。とはいえ団体やマネージメント推薦枠もあるので全員が同じ水準ではなく、なんでこの程度で出るの? という歌手も何人かいました。

この日は休憩中にゼツダ先生の奥様クリスティーナさんからファーノの別荘の昼食にお誘いがあり、日本ロッシーニ協会の役員3人(朝岡・金井・私)でお招きにあずかりました(パルマ音楽院で学ぶ日本人学生・横前さんも一緒にうかがいました)。とはいえゼツダ先生はスペイン風の食事時間をとりますので、この日は午後3時半に前菜、4時過ぎのパスタを経て、5時近くにデザートをいただく流れで、その間ずっとワインを飲み続けた朝岡さんと筆者はグロッキー状態、ホテルに戻ったのは5時半でした。その結果、夜の《アルミーダ》は疲労困憊でヨレヨレぼろぼろでした……成田を発った翌日の話です……(笑)。

◎ 《アルミーダ》(アドリアティック・アリーナ。8月13、16、19日観劇)

今年のROFはルカ・ロンコーニ新演出の《アルミーダ》で幕開けしました。演奏と配役は次のとおり。

カルロ・リッツィ (Carlo Rizzi) 指揮
ボローニャ歌劇場 (市立劇場) 管弦楽団&合唱団
アルミーダ: カルメン・ロメウ (Carmen Romeu)
リナルド: アントニーノ・シラゲーザ (Antonino Siragusa)
ジェルナンド/カルロ: ディミトリ・コルチャック (Dmitry Korchak)
ゴッフレード/ウバルド: ランダル・ビルズ (Randall Bills)
イドラオテ/アスタロッテ: カルロ・レポレ (Carlo Lepore)
エウスターツィオ: ヴァシリス・カヴァヤス (Vassilis Kavayats)



筆者は2日目(13日)から3回観ました。1993年《アルミーダ》ROF初演から21年ぶりのロンコーニ新演出で、前回は「魅惑の庭園」でボローニャ歌劇場の女性合唱団員にパニーガールの姿をさせるなどして大ブーをくらいましたが、今回はさほど挑発的な要素は無く、ロンコーニも年とったなあと感じます。幕開けでオペラ・デイ・プーピ Opera dei pupi (19世紀にシチリア島で人気を博した操り人形)の十字軍騎士たちが大きな箱の中に釣り下がっていて、同じ姿の合唱団が舞台上で歌いますが、その設定の意味がいま一つ判りません。その後は背景の壁や移動式の書割を交えながらも変化に乏しいまま進行し、魅惑の庭園では合唱団の女性たちが頭に大きな飾りをつけて華やかに登場しました。

アルミーダを務めたカルメン・ロメウはバレンシア生まれのスペイン人で、1984年生まれ。2011年の若者公演《ランスへの旅》コルテーゼ夫人&デアでROFデビューし、2012年《バビロニアのチーロ》アルジェーネ、2013年演奏会形式《湖の女》エーレナに続いての大抜擢。朝岡さんが即座に「アウンサン・スーチー似」と言ったとおりの、痩身で背の高い女性です。

美人で見栄えがしますが、最初の2幕は黒い衣装でやや地味な感じがつきまとい、妖艶さやセックス・アピールは不足がち。女の色香ではルネ・フレミングに負け、ドラマティックな力強い歌唱では MARIA・カラスに届きません……それもあってか、変奏アリアやカーテンコールに「ブー」を叫ぶ人もいました。とはいえ声楽的にも演劇的にも過酷なアルミーダをこれだけ立派に歌えば、大健闘と言って良いでしょう。声のヴォリューム不足、高音で叫ぶのも致し方のないところ。最初から最後まで彼女が裸足なのも、ちと可哀そうな気がしました。

主要3人のテノールではリナルド役のシラゲーザが圧倒的。地声的な発声ですが、アクトの力強く張りのある声で他のテノールを凌駕しました(彼は日本の舞台では明らかに手を抜きますが、ベアゼロでは実力を十二分に発揮します)。ジェルナンド/カルロの2役を務めたディミトリ・コルチャックも成長の跡が著しいのですが、高音はややきつく、抜け切れない印象。ゴッフレード/ウバルド役のランダル・ビルズは2012年の若者公演でベルフィオーレを歌ったアメリカ人。まだ若く、声も近鳴りで後方の観客には小さく弱く聞こえたそうです。筆者は1列目、5列目、2列目の順にど真ん中でしたから力強い声に聞こえましたが、第3幕の二重唱と三重唱では明らかにコルチャックやシラゲーザに比して響きが足りず、まだまだこれからと思いました。

イドラオテ/アスタロッテ役のカルロ・レポレは立派な声と表現で、蝙蝠(というか、ややバットマン風)の扮装で悪霊の仲間と判ります。記憶が定かではありませんが、悪霊たちのマスクと衣装は1993年のそれと同じ(もし

くはほぼ同じ) と思います。

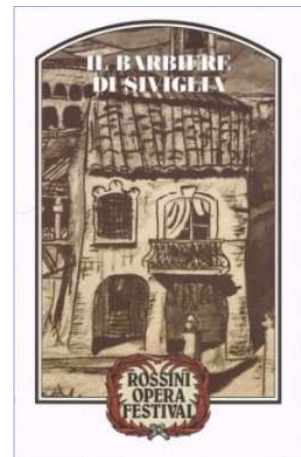
第2幕のバレエはコンテンポラリー・ダンスのグループによるもので、シルエットに始まり、途中で舞台に飛び出て踊ります。正直「なんじゃこりゃ。訳わからん」といった振付けですが、2回目と3回目は個々の動きを観察し、現代舞踏のテクニクを楽しみました。リッツィの指揮がダイナミックな音楽を導き、ヴァイオリン、チェロの独奏も巧みで、ロッシーニの改革的オペラ・セーリアの真価を満喫させました。ただ、3回とも第3幕フィナーレ序奏の急迫パッセージで第一ヴァイオリンが全然揃わず、ボローニャの弦はこんなに下手だったかなあという印象です。

最終シーンについて付言すると、本来の設定と違って愛の神が現れ、リナルドに捨てられたアルミーダが愛の神の矢を手にとって腹に押し当て、自殺したと暗示します。そして悪霊に囲まれて翼が生え、悪霊たちに担がれて去っていきます。アルミーダの衣装が第1幕と第2幕は黒で悪霊の仲間であることを示しますが、第3幕は赤いドレスで愛に目覚めた女に転じたことが判ります。要するに魔女から恋する女になりながらもリナルドに捨てられて自殺し、悪霊に戻って復讐の鬼と化した、ということなのでしょう。こうしたアルミーダ解釈は今回が初めてで、ロンコーニの独自性が表れていました。

◎ 《セビーリャの理髪師》(ロッシーニ劇場。8月14、17日観劇)

《セビーリャの理髪師》は、演奏会形式もしくはセミステージと予告され、演出家の名前もありませんでしたが、蓋を開けたらウルビーノ美術学校 (Accademia di Belle Arti di Urbino) の学生たちが共同で演出と装置を制作し、初日に大評判となりました。演奏と配役は次のとおり。

ジャコモ・サグリパンティ (Giacomo Sagripanti) 指揮 ボローニャ歌劇場 (市立劇場) 管弦楽団、ペーザロ・サン・カルロ合唱団 (Coro San Carlo di Pesaro)
アルマヴィーヴァ伯爵: フアン・フランシスコ・ガテル (Juan Francisco Gatell)
バルトロ: パオロ・ボルドーニャ (Paolo Bordogna)
ロジーナ: キアラ・アマール (Chiara Amarù)
フィガロ: フロリアン・サンペイ (Florian Sempey)
バジーリオ: アレックス・エスポージト (Alex Esposito)
ベルタ: フェリーチャ・ボンジョヴァンニ (Felicia Bongiovanni)
フィオレッコ/士官: アンドレア・ヴィンチェンツォ・ボンシニョーレ (Andrea Vincenzo Bonsignore)
アンブロージオ: アルベルト・パンクラツィ (Alberto Pancrazi)



演出や問題点は後回しにして、指揮者と歌手から話を始めましょう。指揮者ジャコモ・サグリパンティはイタリア人で、1982年生まれの今年32歳。DVDで視たマルティーナ・フランカの《パルミラのアウレリアーノ》では特別な印象を持ちませんでしたが、この《セビーリャの理髪師》で俄然注目しました。序曲からしてロッシーニ的な創意と変化が感じ取れ、弦楽器にピリオド奏法的な用法を求めています。ちなみに彼はロッシーニ音楽院でピアノと作曲を修めてボローニャ歌劇場で研鑽を積み、ミケーレ・マリオッティの3年後輩に当たります。オペラ指揮者として遅れをとっても今後が楽しみです。

歌手はみな若く、優秀なメンバーが名を連ねています。伯爵役のフアン・フランシスコ・ガテルはアルゼンチン人の若いテノールで、2012年《絹のはしご》のドルヴィルと演奏会形式《セビーリャの理髪師》の伯爵でROFデビューしました。観劇した2回は14日より17日の方が生き活きとして声に艶があり、カンツォーネの感情表現や大アリアの技巧も傑出しています。ロジーナ役のアマールは独自のアジリタ唱法が目覚ましいものの、見た目がずんぐりしていて、アマールというよりマンマの遺伝子を受け継いで“まん丸”です。バルトロのパオロ・ボルドーニャは喜劇的な演技に優れる反面、歌はあまり冴えません。

驚いたのがフィガロ役のフランス人フロリアン・サンペイ。女性的な顔つきで柔らかな声の新進バリトンで、1988年生まれだから今年26歳です(ボルドー歌劇場のパパゲーノでデビューしたのは2010年1月。当時まだ19歳と思われま)。柔軟で軽やかな声と歌唱、表情も豊かなので将来有望と確信しました。加えてバジーリオのアレックス・エスポージトが実に素晴らしいバス歌手&怪優とあって、近年稀な粒揃いの配役となりました。

すごく面白いのに問題も多いのが、ウルビーノ美術学校による演出と制作です。フィガロが平土間6列目に客を装ってスタンバイし、第一声で周囲の観客をびっくりさせる仕掛けは良いとしても、舞台はセミステージらしくあまり使わず、楽しい一場も平土間の後半部で展開します。よって平土間の前半分、天井桟敷の2列目以降の

観客には、なにがどう行われているのかさっぱり判りません。幸い筆者は1階と2階の中央ボックスですから、伯爵のカンツォーネで月に見立てたボールが上に昇り、張子の馬に乗った士官や籠に乗ったバジーリオが平土間後方の入口から現れる様子がすべて見えました。平土間の観客の大半は役者や助演が舞台に近づくまで出来事に気づきません。怒って途中で退席したお客もいましたが、無理ありませんね。

合唱団は舞台後方の上部に横一列に並んで歌うのですが、アマチュア合唱団の男声メンバーらしくアンサンブルで音楽とズレまくり、14日はみっともないほど音楽と合いませんでした。これは指揮者サグリパンティのせいではなく、合唱団の水準や配置の問題と言えます。統括する演出家がおらず、歌手と若い学生たちが自由にアイディアを出したとおぼしき舞台は支離滅裂ですが、それはそれで笑いの小ネタが豊富にあって大いに楽しめました。

◎ 《パルミラのアウレリアーノ》(ロッシーニ劇場。8月15、18日観劇)

《パルミラのアウレリアーノ》がマイナーな作品であることは、ROF35年の歴史で今回が初上演となったことでも判ります。演奏と配役は次のとおり。

演出：マリオ・マルトーネ (Mario Martone)
指揮：ウィル・クラッチフィールド (Will Crutchfield)
ロッシーニ交響楽団 (Orchestra Sinfonica G. Rossini) ボローニャ歌劇場合唱団
アウレリアーノ：マイケル・スパイレス [スパイヤーズ] (Michael Spyres)
ゼノービア：ジェシカ・ブラット (Jessica Pratt)
アルサーチェ：レーナ・ベルキナ (Lena Belkina)
ブリア：ラッファエッラ・ルピナッチ (Raffaella Lupinacci)
オラスペ：デンプシー・リベラ (Dempsey Rivera)
リチーニオ：セルジョ・ヴィターレ (Sergio Vitale)
大祭司：ディミトリ・? (Dimitri Pkhaladze)
羊飼：ラッファエーレ・コスタンティーニ (Raffaele Costantini)



実演に接しても、音楽は良いけれど劇的展開に乏しく、皇帝の慈悲や寛容で急転直下解決するメタステージオ風の結末も時代錯誤……との前提が覆りませんでした。それ以上にロッシーニの音楽の美しさ、素晴らしさに魅了されました。個人的には《タンクレーディ》以上に好きな音楽がたくさんあります。

写実的演出では単調さを免れない、かといって現代化にも不向きな題材とあって、演出家マリオ・マルトーネも苦慮したことでしょう。衣装はそれなりに写実的、第1幕は紗幕の素材を使った低い壁で迷路を作り、中央の後方に神殿の内部を見せます。そして低い壁を徐々に天井に吊り上げて舞台転換して迷路に隠れていたレチタティーヴォ・セッコ伴奏のフォルテピアノとチェロが見え、セミステージに近い形になります。第2幕はさらに殺風景ですが、第1幕から物が減っていく流れなので、個人的には特に不満をおぼえませんが。フォルテピアノの女性奏者が舞台上で役者として演技するのも斬新で、そうした視覚効果やアイディアが劇としての変化の乏しさを補ってくれました。

気に入ったのが、四頭の山羊を連れた牧人の登場するユーフラテス河岸のシーン。三頭の子山羊が放し飼いで、舞台のそこかしこに置かれた草を自由に食みます。15日の公演では親山羊がおしっこをし、オーケストラ・ボックスの屋根に向かってゆっくり流れてきて冷や冷やしました(屋根の下のコントラバス奏者が移動しましたが、歌手たちはドレスの裾をたくし上げずにそのまま演技していました。18日には子山羊の一头が舞台前方や、フォルテピアノの足先まで来ました)。

歌手はアウレリアーノ役のマイケル・スパイレス [スパイヤーズ] がバリテノーレの本領発揮で、バリトンの声質の低音域からファルセットの超高音まで幅広い音域を駆使しました。その声を嫌う人も多いと思いますが、これもまたロッシーニ時代のテノールの「タイプの一つ」なのです。ゼノービア役のジェシカ・ブラットは2年前の《バビロニアのチーロ》から大きく成長し、発声も改良したらしく、高音のヴォリュームと声の伸び、力強さで圧倒しました。すでにベリーニとドニゼッティの作品で活躍しており、遠からずヴェルディ歌手に転身するかもしれません。

残念なのがアルサーチェ役を歌ったウズベキスタンのタシュケント生まれのメゾソプラノ、レーナ・ベルキナ。1989年生まれですから今年25歳。まだ声が熟しておらず、若過ぎます。ROF初登場でこの役は荷が重すぎます。小柄なので、大柄のブラットと並ぶと母子のように見えてしまいます。カストラートのために書かれた

アルサーチェは 2011 年マルティーナ・フランカのカウンターテナー、フランコ・ファジョーリの印象も強くあるので、メゾソプラノを使うならバルチェローナくらいの経験と押しが無いと満足できません。

音楽学者でもある指揮者ウィル・クラッチフィールドは、序曲のテンポとニュアンスを大きく変えて《セビーリヤの理髪師》との違いを強調し、こういう演奏法や解釈もありか、と驚かせます（アッチャッカトゥーラをアッポジャトゥーラに、もしくはその逆にする解釈など）。彼の校訂した批判校訂版の初使用とあって、従来のヴァージョンに無いパッセージが聞こえ、カットの復活もあって、興味深い演奏でした。

◎六つの弦楽ソナタ [六つの四重奏ソナタ Sei sonate a quattro] (ロッシェニ劇場。8月15日 11:00~)

今回鑑賞した最初のコンサートは、ロッシェニが少年時代に作曲した、ヴィオラが無くコントラバスを含む異例の編成による全6曲の弦楽四重奏曲の全曲演奏です。奏者は次のとおり。

第一ヴァイオリン：サルヴァトーレ・アッカルド (Salvatore Accardo)

第二ヴァイオリン：ラウラ・ゴルナ (Laura Gorna)

チェロ：チェチーリア・ラディック (Cecilia Radic)

コントラバス：フランコ・ペトラッキ (Franco Petracchi)

筆者の理解に間違いがなければ、ROFにおける「六つの弦楽ソナタ」の全曲演奏会はロッシェニ生誕 200 周年の 1992 年が唯一で今回が 2 度目。筆者は 92 年のそれも聴きましたが、今回と同じサルヴァトーレ・アッカルドとフランコ・ペトラッキを含む 4 人が驚くほど自由闊達な演奏を繰り広げていました。あの感動を 22 年後に再び……との期待は、残念ながら打ち砕かれてしまいました。理由は簡単。72 歳のアッカルドにバガニーニの名手としての面影が無く、76 歳のペトラッキも往時の才気溢れる演奏スタイルを失っています。老いたというより、ピークをとうに過ぎた演奏家の姿がそこにありました。他の 2 人は若い女性で、チェロは巧みでしたが第二ヴァイオリンはいま一つ。時の流れは残酷ですね。でも 46 年前に彼らの行った録音が、この作品の永遠の名盤として後世に残ることだけは間違いありません (1978 年 10 月録音。Philips)。

実は演奏の良し悪しとは別に、今回の演奏会には別な意義がありました。それはロッシェニ財団の批判校訂版第一次校訂譜を用いた初演奏となった点です。その校訂をめぐって新事実も浮上しましたが、これについては後日メルマガに書かせていただきます。



◎演奏付きのクラッチフィールド講演会 Conferenza-concerto Crutchfield (サーラ・デッラ・レプブリカ。8月17日 11:30~)

《パルミラのアウレリアーノ》の校訂者でもあるウィル・クラッチフィールドの講演会。「ジョヴァンニ・バッティスタ・ヴェッルーティ：アウレリアーノのためのヴィルトゥオーゾ Giovanni Battista Velluti: un virtuoso per Aureliano」と題された講演と 3 人の歌手の演奏がセットになっています。会場のサーラ・デッラ・レプブリカはロッシェニ劇場の中の小さなイベント・スペース、歌手は《パルミラのアウレリアーノ》プブリアを歌ったラッファエッラ・ルピナッチ、若者公演《ランスへの旅》でフォルヴィル伯爵夫人を歌ったイサベル・ロドリゲス・ガルシア、メリベアー侯爵夫人を歌った脇園彩さんと、クラッチフィールドが伴奏しました。

クラッチフィールドの講演は、カストラートのヴェッルーティの特色をなす独自の装飾法が初期ロマン派の音楽を決定づけたと実証する、大変興味深い内容でした。ベッリーニやショパンでお馴染みの装飾は、実は 1810 年代にヴェッルーティが歌唱に取り入れた様式で、当時は新奇に思われた「ヴェッルーティのスタイル」を真似た 1820~30 年代の作曲家によってロマン派音楽の特色が形成された、というのですから驚きです。目からうろこの発見……いやはや恐れ入りました。

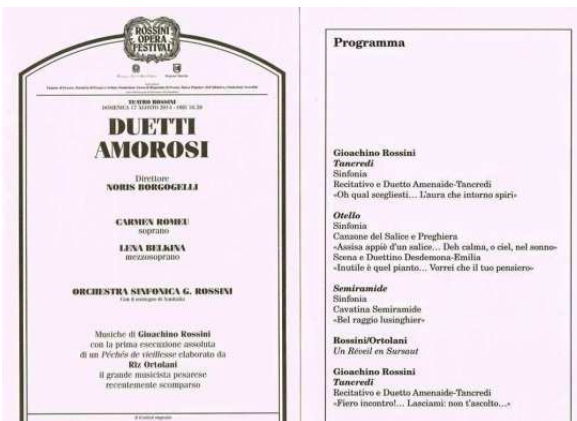
演奏曲は、ジュゼッペ・ニコリーニ《カルロ・マーニョ》のシェーナとアリア、フランチェスコ・モルラッキ《テバルドとイゾリーナ》のカヴァティーナほか 2 曲。アンコールは 3 人の歌手が、《パルミラのアウレリアー



ノ》アルサーチェのアリア／同じアリアのヴェッルーティによる装飾ヴァージョン／《セビーリャの理髪師》ロジーナのカヴァティーナを一節ずつ歌い比べるお遊びでした。脇園彩さんは《ランスへの旅》に素晴らしいパフォーマンスを繰り広げたので講演後にお話ししたら、東京藝大で《エルミオーネ》に関する論文を書いた際に『ロッシニアーナ』をたくさん活用したとのこと。まだ 20 代半ばの若さですが、ロッシニアーナ歌手としての未来は明るい気がします。日本ロッシニアーナ協会の戦力になってくれるといいなあ……

◎愛の二重唱集 **Duetti amorosi** (ロッシニアーナ劇場。8月17日 16:30～)

アルミーダを歌ったカルメン・ロメウと《パルミラのアウレリアーナ》でアルサーチェを歌ったレーナ・ベルキナによるデュオ・リサイタル。伴奏はノリス・ボルゴジェッリ (Noris Borgogelli) 指揮ロッシニアーナ交響楽団。曲目は《タンクレーディ》の序曲と二重唱、《オテッロ》の序曲、「柳の歌と祈り」、「小二重唱」、《セミラーミデ》の序曲と「美しい光が」といった具合に一つのオペラの序曲と歌を組み合わせ、今年1月に亡くなったペーザロ生まれの作曲家リズ・オルトラニ (Riz Ortolani, 1926-2014) のオーケストラ曲の世界初演も含まれます (ロッシニアーナのピアノ曲《びっくりして目を覚ます》の管弦楽編曲。詳細は別紙参照)。



カルメン・ロメウは前夜アルミーダを歌ったばかりで喉が疲れており、一昨日アルサーチェを歌ったレーナ・ベルキナも精彩を欠いて良いところがありません。なんでこんな演奏会をするのだろう、と疑問でしたが、聴いているうちに答えが見えてきました。

以下、私の勝手な推測を書きますと、仕掛け人は指揮者ノリス・ボルゴジェッリなのだと思います。なにしろアンコールに先立ってゼツダ先生のいるパルコに向かって、「この演奏会は愛の二重唱集と題されていますが、デズデーモナとエミーリアは友人同士だし、アメナイーデとタンクレーディのデュオも愛の二重唱ではありません。本当の愛の二重唱はこれです」と言って二人の歌手に「二匹の猫の滑稽な二重唱」を歌わせ、カデンツァや旋律の一部を自分で歌ってしまうのです。そして主役のロメウとベルキナを差し置いて拍手を独り占めにすると彼女たちを下がらせ、「最後はロッシニアーナ交響楽団のアンコールです」と言って前記オルトラニの映画音楽の代表作『世界残酷物語』(1962年)の主題歌「モア (More)」を演奏し始めるではありませんか!

歌の演奏会なのに自分を主役にするこゝろしか考えない、空気の読めない目立ちたがり指揮者。こいつ誰やねんと思ってネットで調べると、ペーザロの隣町ファーノに生まれ、11歳で地元の素人劇団の役者を務め、そこで演出も行い、ロッシニアーナ音楽院でヴィオラとハーブのディプロマを取り、並行して声楽を学び、たくさんの賞を受賞し(但し具体的なことは一つも書いていない)、2001年にレンツェッティに師事してペーザロのアカデミーの指揮者コースに学び、近在のオーケストラを指揮し、ファーノのフォルトゥーナ劇場の正午コンサートの監督を務め……と、たいしたことのない経歴を並べたてています。本人は隠したいようですが、2005年 ROF のフローレス & デイドナート主演《セビーリャの理髪師》にアンブロジーオ役で出演しています。出たがり、一流の仲間入りをしたいと望んであちこち首を突っ込みながら全然評価されないタイプ……そんな風に見えました。

◎ファン・フランシスコ・ガテルのリサイタル (ロッシニアーナ劇場。8月18日 17:00～)

ブエノスアイレスの州都ラプラタ (La Plata) 生まれのアルゼンチン人テノール、ファン・フランシスコ・ガテル (Juan Francisco Gatell) のリサイタルです。ピアノ伴奏はベアトリーチェ・ベンツィ (Beatrice Benzi)。ガテルの誕生日は1978年11月28日ですから35歳。ROFは2012年《絹のはしご》でデビューし、演奏会形式《セビーリャの理髪師》のアルマヴィーヴァ伯爵も歌っています。この日は前夜アルマヴィーヴァ伯爵を歌ったばかりですが、影響はなく、前半はロッシニアーナのフランス語歌曲、《ドン・ジョヴァンニ》のドン・オッ



ターヴィオのアリア 2 曲、ベートーヴェンのイタリア語アリエッタその他を、後半はドニゼッティ、オベール、グノーの楽曲を歌いました。

声に独特な色気と甘さがあり、感情表現も豊か。ちょっと不良っぽい風貌と哀切な表情も魅力的で、即ファンになりました。数年前から世界の劇場でアルマヴィーヴァ伯爵を務め、この日アンコールで歌った《アルルの女》はちと若過ぎる気もしましたが、ピアソラの曲（題名が判りません。頭のおかしい男の歌だそうです）が素晴らしく、選曲のセンスも大変良いと思いました。来年 ROF でまた聴きたい歌手です。

翌 19 日は 11 時から音楽院のホールで「ロッシェニマニア／ラジオ・ロッシェニ (Rossinimania / Radio Rossini)」と題したジャズ&ロックのコンサートもありましたが、旅の疲れでパスしました。

◎エヴァ・ポドレシのリサイタル (ロッシェニ劇場。8月20日 16:30～)

20 日の夕刻は、エヴァ・ポドレシ (Eva Podles, 1952-) のリサイタル。伴奏はカルロ・テナン (Carlo Tenan) 指揮フィラルモーニカ・ジョアキーノ・ロッシェニです。

2012 年《バビロニアのチーロ》のタイトルロールを驚異的な声量と技巧、凄みのあるコントラルトの声で歌ったポーランド人ポドレシ。筆者は彼女の ROF デビュー (2001 年《テーティとペレーオの結婚》) から何度か実演に接しています。今回の曲目は管弦楽曲と交互とあって、前半の歌はグルック《オルフェとウリディス》のエール、《バビロニアのチーロ》のカヴァティーナ、《ルクレツィア・ボルジア》バッラータという無難な 3 曲。

初めて聴く人があつと驚く真正コントラルトですが、62 歳になった現在は声の衰えよりも歌い方から気品が減って「オバサン化」した感じです。バッラータの後、再び出てきて拍手を受けると指揮者テナンが指揮台に上がり、ポドレシが意外な感じで「休憩無し? (Senza pausa?)」と問いました。そしてテナンが「ええ」と頷くと一瞬不満げな顔をし、プロコフィエフのカンタータ《アレクサンドル・ネフスキー》作品 78 の第 6 曲を歌いました。素晴らしい歌唱でしたが筆者はハラハラ、ドキドキ。だってオケと歌が交互のプログラムなのに、指揮者がドニゼッティとプロコフィエフの歌を続けちゃったのです。事前の打ち合わせに不備があったとしても、平気で指揮した神経が判らん……ポドレシが尋ねた段階で気づけよ! ……

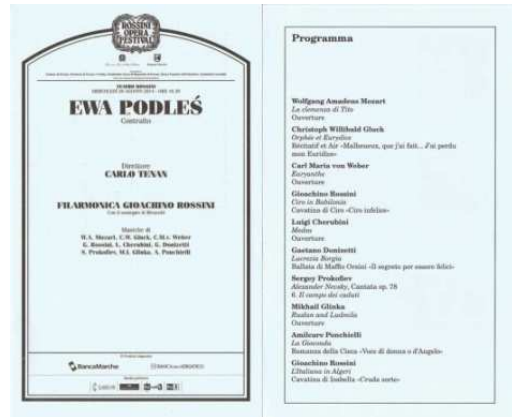
ポドレシ、明らかに怒ってましたね。で、カンタータの後に袖に引っ込み、また出てくると、指揮者に顎で「引っ込むわよ」と合図して再び袖に……ちょっと間を置いて出てきた指揮者が客席に向かって「ちょっと休みます」と告げ、休憩になりました。そして後半、グリンカ《ルスランとリュドミラ》序曲の後、ポドレシはとても美しい青色の艶やかなドレスで登場しました。そう、彼女は最初からプログラム後半を衣替えして歌うつもりだったのに、休憩なしにそのままプロコフィエフを歌わされてしまったのです。

残り 2 曲は《ジョコンダ》のロマンツァと《アルジェのイタリア女》のカヴァティーナ……観客に笑みを振り撒いてもご機嫌ナナメなんだろうなあ、と思って見てました。裏で指揮者に、凄みのあるコントラルトの声で「てめえ、ふざけんよ!」と言ったりして、なんて想像しながら……あ、まだ歌の感想を書いていない……でも、これで察しがつきますよね (笑)。

◎《小ミサ・ソレムニス [小荘厳ミサ曲]》管弦楽伴奏版 (ロッシェニ劇場。8月21日 20:30～)

筆者の締めは最終日の前日、21 日の《小ミサ・ソレムニス》管弦楽伴奏版の演奏会です。アルベルト・ゼツダ指揮ポーニャ歌劇場管弦楽団&合唱団。ソリストはオルガ・センデルスカヤ (S)、ヴェロニカ・シメオーニ (Ms)、ディミトリ・コルチャック (T)、ミルコ・パラッツィ (B)。

いつもは仕事が気になって最終コンサートの前に帰国しますが、ゼツダ指揮《小ミサ・ソレムニス》を逃すわけにはいきません。ソリストはやや小粒ですが、この作品は管弦楽が主役みたいなどころがあり、精妙な和声の変化や色彩的な編曲が聴きどころ。予想通り、ゼツダの指揮が「最高」でした。テンポが速く、何かに憑かれたみたいな、否、神がかり的な感じです。席がパルコの中央 15 番なの



にソリストのヴォリュームが小さいのは、こちらの眼が指揮に、耳がオケに集中しているせいでしょうか……ともあれこの日の演奏は、筆者がこれまで聴いた《小ミサ・ソレムニス》管弦楽伴奏版のベストでした……歌手はともかく、ロッキーニ&ゼツダの音楽に大満足！

個々の感想は省略します。ポポロ広場で同時放映したので、来年 ROF の DVD になることでしょう。劇場を後にしながら、「今年の ROF もこれで終わりか……早く来年にならないかなあ……」なんて考えていました。

▼まとめ▼

今年の ROF は演目とキャストから低調と予想されましたが、蓋を開ければそれなりに満足度の高いフェスティバルになりました。予算縮減で有名歌手が少なく、低予算の舞台が多かったのは事実でも、ロッキーニの聖地ならではのユニークかつ高水準な出来だったと思います。演奏会にハズレはあっても、個人的にはオペラ 3 演目と若者公演《ランスへの旅》を大いに楽しみました。

経済危機で一昨年からスポンサーの撤退が始まり、今年の ROF は集客と収益の双方でかなりのダウンになりました。ペーザロ市も厳しい状況らしく、馴染みの店の閉店や、「売ります」「貸します」の貼り紙を見て驚いた人も多はず。税収が減れば、ROF への公的援助も減って当然です。

観客に占める外国人の割合も 63.5%で昨年より減りましたが、フランス人、ドイツ人に続き、イギリス人を抜いて日本人が 3 位に浮上して話題になりました。そのせいか ROF も日本人を特別な存在（大事なお客）と認知しており、劇場などに貼られる過去の写真にも必ず日本人がたくさん写ったショットが選ばれ、優先的に良い席を与えられているように感じます。

ともあれ、今年の ROF と夏の旅も無事終わりました……めでたしめでたし。

付記：本稿は日本ロッキーニ協会メールマガジン「ガゼッタ」第 73～74 号（8 月 25、27 日、9 月 5 日配信）から一部表記を変更し、図版を加えて『ロッキニアーナ』第 35 号に転載した文章の書式変更版です。

（水谷彰良）



2014 年のアドリアティック・アリーナとロッキーニ劇場（筆者撮影）